

歴史的現実を見据えつつ…

君が代の／安けかりせば／
かねてより／身は花守と／ なりけむものを

幕末勤皇志士の一人として知られる平野国臣は、このやうな歌を遺したが、私も、できるなら、「花守」ならぬ「旅人」として、一生を送りたい。にもかかはらず、国臣の時代と同じく、否、それ以上に混迷の度を深めつつある一平成の御代を黙視できぬゆゑ、ここ数年来、「研究」を続けてゐる。

他人のことは知らぬが、私は、「進歩主義」者の言動など一自他を取り巻く現実に対する苛立ちから、「学問」を志した。勤勉とは決して云へず、取り立てて論理的でもない私が、大学院にまで進んだのは、さうした苛立ちのせいだらう。無論、「研究」や「学問」を通じて、自分の苛立ちを解消できるなどとは思つてゐない。だが、かくも苛立つ理由を明らかにし、それを克服する方途を探り当てたいと考へて来た。

私が、「進歩主義」者に苛立ちを覚えるのは、彼らの行動に「甘え」を見てしまふからだ。例へば、私が中学・高校の六年間を過ごした母校では、入学式や卒業式において国歌斉唱も国旗掲揚も行はれなかつた。国立学校でありながら、「進歩主義」的な教員たちの勢力が強かつたからである。そのやうなあり方は、個人的には認め難くとも、一つの政治的主張としてはあり得るだらう。ところが、しばらくたつてから、教員側のさしたる抵抗もないまま、なし崩し的にそれらが実施されたのである。私は、事態の正常化を評価しつつ、教員達の事大主義に情けなさを感じた。その「転向」は、彼らが如何に弁疏しやうとも、国立学校の教員といふ自らの立場を守るためであつたからだ。ついでに云へば、昭和戦前期における「転向」の多くも、同様の卑しさによるものではなかつたか。

それに引き換へ、「日本主義」者（＝「右翼」）の覚悟は、瞠目に値する。敗戦後に限つても、大東塾十四烈士、三島由紀夫、森田必勝、影山正治、野村秋介…。彼らは、自身の生命を絶つてまで、信念を貫徹した。それも、誰かに強ひられたわけではなく、「かくすれば／かくなるものと／知りながら／已むに已まれぬ／大和魂」といふ吉田松陰の絶唱そのまま、「内なる日本」にのみ信従し、死を選んだ。たとへ、その行為が、眼前の「政治」情勢に何ら影響を与へなかつたとしても、悠久なる「道義」の見地に立てば、保田に倣つて、「偉大な敗北」と鑽仰するよりほかないだらう。

かかる物云ひは、あまりに浮世離れしたものかも知れない。確かに、「道義」の蓄積たるべき「歴史」までもが、教科書問題や靖国神社参拝問題など一謀略めいた国際的圧力の道具として用ゐられ、その本質が忘却されつつある現在、如何なる「敗北」も許されないといふ危機感を持つのは不自然ではない。だからこそ、《新しい教科書をつくる会》などによる「政治」的活動は、少なからぬ意義を持つた。けれども、彼らの活動は「対症療法」に過ぎず、それゆゑ、より根源的な克服（＝「維新」）の担ひ手たり得ないこともまた、否

定のできぬ事実だと思はれる。

さらに云ふなら、その活動は、「対症療法」としても拙劣ではなかつたか。なぜ、昨年といふ時期に、あのやうな教科書を刊行したのか。日韓共催のサッカー・ワールドカップがもたらす経済効果などを考慮すれば、反対勢力の執拗な妨害工作がなくとも、厳しい採択状況は十分に予想できたはずだ。このことは、彼らが、国際的謀略への対処といふ「当座の時務」に囚はれ、自身を取り巻く「歴史的現実」への視座を欠いてゐることを示すものではないか。

同様のことは、中共に関しても云へるだらう。我々は、今日、その廉価な労働力を抜きにして、衣食の水準を維持することができぬ。つまり、我々自身の享受してゐる安楽な「近代生活」こそが、忌まはしき国際的圧力の温床となつてゐるのだ。かうした「歴史的現実」の功罪を意識することなしに、怒りを募らせたり、徒党を組んだところで、事態の本質は変はらない。それどころか、自らの愚かさや醜さを世に晒すだけであらう。

とは云へ、このやうな「歴史的現実」に居直り、浮薄な流行に溺れ続けることも否定されるべきである。究極的には、「近代生活」の根源的な克服（＝「維新」）を志向せねばなるまい。懶惰な私にとって、その道のりはあまりに遠く険しいが、少しずつでも歩んでいきたい。